日本統治期における韓国民族運動と経済の論理

－東亜日報グループ研究（一）－

木　村　　幹*

目次

はじめに － 本稿の目的と視角
第一章　東亜日報グループ前史
　第一節　蔚山金氏の登場
　第二節　金性洙の登場と、人脈形成
第二章　東亜日報グループの登場
　第一節　中央学校入手
　第二節　経営権独占と「東亜日報人脈」の成立
　第三節　土地から総督府系資金へ
むすびにかえて－運動の基盤と「不正な金」

*神戸大学大学院国際協力研究科助教授

はじめに － 本稿の目的と視角

今日までの半世紀あまりの東亜日報の苦難と栄光は、そのまま我が民族の苦難と栄光に直結している。異民族統治下において民族主義を標榜して発足した言論機関の道は決して順調なものではなく、その時々において、受難と忍辱、挫折と再起の連続であった。世俗的な毀誉褒貶を超越した我が先人達は、これを見事に克服し、民族の大義を旗印に、膝を屈することを知らなかった[1]。

朝鮮・韓国近現代史。今日までそれらに関する研究としては、歴史・政治・経済等の分野において様々な研究成果が積重ねられている。これらの中に、多くの注目すべき研究が数多く存在することは、今さら筆者が指摘するまでもないことであるが、惜しむらく、それらの多くは、日本植民地支配の功罪や、内在的発展、更には、開化派研究や民族独立運動など、特定の分野に集中しており、また、それらの分野においても、各々が必ずしも連関して存在している訳ではない。結果、朝鮮・韓国近現代史の多くの部分が「断絶」したままになっている。

このような、朝鮮・韓国近現代史に関する

1　金相万『東亜日報社史』巻一，東亜日報社【韓国】，1975年4月，6ページ。

「断絶」については多くの部分を指摘できようが、そのような「断絶」の中でも大きなものは、1）併合に至るまでの研究（就中、開化派研究）と、併合後の民族独立運動の研究の間の断絶、そして、2）日帝期における民族独立運動と、解放後の韓国現代史との間の断絶、の二つであろう。前者においては、開化派と呼ばれる諸勢力と、併合後の民族独立運動を行った諸勢力との関係は、今日まで必ずしも明らかにされておらず、これらの中間にある一九一〇年代（より正確にいうなら、併合から三一運動までの間）は、相対的な研究の空白期として存在している。しかし、実際には、朴泳孝・尹致昊らに代表される開化派や、開化派の一翼を担った大韓協会の有力会員達は、日帝期においても、継続して、大きな存在であったし、その彼らと三一運動を担った諸勢力の間には、何らかの密接な関係が存在していた、と考えられる。また、後者、即ち、解放前の独立運動を担った諸勢力、就中、三一運動の中核であったといえる、土着派政治勢力と、解放後の韓国政治との関係についても、必ずしも今日まで、その実態面においても、また、彼らに対する評価の面でも、確立した研究があるとは言い難い状況にある。近代史研究の成果が、現代史研究に十分反映されていないと言える状態であり、誠に惜しむべき状況と言えよう。

筆者は、以上のような観点から、これらの断層を繋ぐものとしての、金性洙・宋鎮禹らに代表される「東亜日報グループ」－それには「資本としてのグループ」と「人脈としてのグループ」の両面がある－に着目し、政治学的観点を交えながら、一つの流れを明らかにしようとする者である。このグループを扱う理由は以下のようなものである[2]。

まず、第一に、このグループの韓国近現代史に占める重要性である。即ち、彼らは一九一九年の三一運動時には、その運動を組織する、言わばフィクサーとしての役割を果たした人々であり[3]、また、一九二〇年代から三〇年代にかけては、「民族の代弁紙」としての東亜日報を、民族運動のアリーナとして提供することにより、朝鮮半島内における民族運動に重要な役割を果たした人々である。また、解放以後においては、彼らは韓国民主党・民主国民党・民主党とつながる、韓国保守野党の中核となり、言うところの「民主化闘争」の中で重要な役割を果たした、とされる。にも拘らず、この東亜日報グループに関しては、我が国において今日まで、体系的な研究はなく、この実態を明らかにすることは、民族運動から民主化闘争までに至る、韓国近現代史の最重要問題に接近する上で、重要で

2　今日までにおける、最も優れた東亜日報グループに関する研究は、伝記や社史を除けば、Carter J. Eckert, *Offspring of empire : the Koch' ang Kims and the colonial origins of Korean capitalism, 1876-1945* , University of Washington Press, 1991、であろう。筆者も本稿を執筆するに当たっては、同書を参考にした部分が大きい。

3　この点については、枚挙に暇がないが、例えば、古下宋鎮禹先生傳記編纂委員會編『古下 宋鎮禹評傳』，同委員會【韓国】，1990年3月，97ページ以下。

あると考えられる。

第二は、発展途上国政治研究全般に関る国家と財閥との問題である。周知のように、この東亜日報を中心とする企業体、即ち、「湖南財閥」は、解放直後の韓国において、最大の地主資本であり、産業資本であり[4]、メディア所有体であり、更には、最有力の高等教育機関の一つを傘下に収める巨大資本であった。解放後、彼らはその力を基盤に政治的進出を実現するが、重要なことは、にも拘らず、彼らが結局、政争に勝利することができず、終始一貫野党の位置に留まりつづけることとなった、ということであろう。このような、一見、強大に見える彼らが、何故に韓国現代政治の主流となることができなかったのか。それは、即ち、今日においても、何故、韓国の巨大財閥がその韓国経済における圧倒的な存在にも拘らず、依然として、時の権力に従属せねばならないのか、という問いに答える為にも、必要な視点であろう。韓国の政治・社会・経済はどのような構造を有しており、何故にこのような現象が生じるのであろうか。

第三に筆者がこれまで一貫して取り組んでいる、韓国ナショナリズム、就中、親日派問題との関係がある。解放後五十年以上経過した現在の段階まで、何故に韓国は親日派問題に拘泥し、これに拘りつづけているのか。その背景にはどのような構造があり、また、そこには構造から発するどのような意識があるのか。このような問題を考える上で、今日、親日派を巡る論争の焦点とも言える東亜日報グループ[5]を扱うことは避けて通れない問題である。彼らは何者であり、人々は何故にそれに拘りつづけているのか。

以上のような観点から東亜日報を扱う訳であるが、勿論、本稿のような小稿を以て、この巨大な歴史上の存在の全体像を明らかにすることは困難であろう。故に、本稿では、これまで述べた問題意識を前提としつつ、主として東亜日報グループの形成過程とその日本統治下における在り方に焦点を絞って論じることにしたいと思う。そこでの中心となる議論は以下のようである。

第一に東亜日報グループの中核である、蔚山金氏の台頭過程とその在り方について論じる。ここでは主として、東亜日報の事実上の社主であった金性洙の幼少年期と彼の父祖について論じることになる。彼らはどのような人々であり、同時代やそれ以前の人々とどのように異なったのか。第二に、人脈としての東亜日報グループの形成過程と旧来の組織・人脈との関係について論じる。ここでは主として、開化派として一くくりにされる併合以

4 例えば、1945年における、朝鮮半島内における原綿消費量の66.36%が、京城紡績によるものであった。解放直後の混乱があったとしても、日本人資本を除外した部分における、京城紡績の圧倒的地位を知ることができよう。京紡七〇年史編纂委員會編『京紡七〇年』，同委員會【韓国】，1989年12月，634ページ。

5 東亜日報グループに対する親日派批判としては、例えば、위기봉『따시 쓰는 東亜日報史』，녹진【韓国】，1991年2月、等。

前の諸勢力と東亜日報グループとの関係が、その人脈的・組織的連続と断絶の観点から論じられることとなる。第三に、東亜日報グループの経済的拡大とその背景にあった資金的構造について論じる。既に述べたように、東亜日報は京城紡織を中心とする「湖南財閥」の一企業であり、経済的にはこれらと別ち難く結び付いた存在であった。東亜日報の新聞活動はこのような経済的基盤に支えられたものであり、また、その人脈も、この湖南財閥の財力を中心に形成されてきたものである。このような湖南財閥がいかに形成され、それはどのような経済的基盤を有していたか。そして、それは彼らの行動にどのような影響を与えたか。

本論に入る上で明らかにしておくべきことは以上で全てである。それでは、早速、本論に入って行くこととしよう。

第一章　東亜日報グループ前史

第一節　蔚山金氏の登場

今さら指摘するまでもなく、東亜日報グループは、金性洙に代表される全羅北道古阜郡出身の大地主、蔚山金氏一族の財力を基盤として成長してきた勢力である。従って、我々は、まず、東亜日報グループそのものを分析する前に、この蔚山金氏の登場とその成長過程について見て行く必要がある。そこで、これまでの研究を参考にしつつ、この点について、簡単にまとめてみることとしよう。

よく知られているように、蔚山金氏とは、新羅の敬順王を始祖とするとされる一族である。一族の中には、朝鮮王朝草創期に重要な役割を果たした金穏や、その五代孫で李退渓と同時代の巨儒として知られる金麟厚等がいる。『蔚山金氏族譜[6]』等によれば、金性洙の祖父に当たる金尭莢も、この流れを引くものである、とされるが、仮にこれらの資料をそのまま信用するとしても、彼らがその直系ではなく、また、尭莢以前の彼の家系が、代々科挙合格者を輩出してきたような、所謂典型的な両班の範疇から外れたものとなっていた[7]ということは、留意されるべきであろう。

大地主として、また、資産家として近現代にて活躍したこの一族の歴史は、事実上、金尭莢が古阜に移住して来た頃からスタートする。古阜移住以前に金尭莢が、何処に居住し、また、何を以て生計を立てていたかは、残念ながら今日残されている資料からは明らかにすることができない。何れにしろ、重要なことは、一八五〇年頃と推定されるある時期に、古阜に移住してきて以来、彼の地主としての資産は急速に拡大し、その地位は、一八七〇年頃には、相当なものとなっていた、ということである。このことは、一八七二年には金尭莢が、また、一八八八年には彼の嗣子であり、後に金性洙の養父となる金祺中が、そし

6　金黄中編『蔚山金氏族譜』甲・乙・丙，回想社【韓国】,1977年。

7　片泓基『韓國科挙史』，明義會【韓国】，1987年5月，225ページ。

て、一八九八年には次男であり金性洙の生父である金暻中が相次いで官界に進出していること[8]からも確認できる。科挙廃止後に進出した金暻中は置くにしても、金尭筴・祺中の官界進出には、それに先立つ科挙合格の記録がなく[9]、彼らの官界進出において、彼らの資産の存在が、一定の役割を果たしたであろうことは、想像に難くない。

彼らが何を以て、このような短い期間に急速な蓄財を為し得たのかは、必ずしも明らかではない。この点について、위기봉は、この一族が朝鮮王朝末期に、一隻の船舶を所有し、それを用いて私貿易を行っていた可能性を示唆している[10]が、この点についても詳しいことはよくわからない。何れにせよ、我々がここで確認しておくべきことは以下の点であろう。それは即ち、この一族が、この地域に数百年もの長期に渡って土着してきた典型的な伝統的地主名望家ではなく、近代に入っての朝鮮社会の大きな変化の中で生まれてきた新興地主であった、ということである。事実、この開港以後併合までの時期は、それまでの朝鮮社会が、新しい商品経済の浸透の中で大きく変容していった時期であり、この頃、この蔚山金氏一族にみられるような、新興地主が各所で登場して来ていた[11]。彼らの蓄財は、その後も順調に進み、金尭筴が死去し、金祺中・暻中の二人の兄弟が中心となる頃になると、彼らは、朝鮮社会における有数の富者の一人に挙げられる程の財産を作り上げることとなっている。

伝説と謎に満ちた金尭筴に比べ、金祺中・暻中の兄弟に関しては、我々は比較的確実に彼らの足跡を辿ることができる。その詳しい蓄財課程については、先学の研究[12]に譲ることとするが、尭筴から祺中・暻中へと世代交代するこの時期において注目すべきは、彼らが一族の経済的台頭に符合する形で、一定の範囲乍ら、社会的運動に乗り出して行ったことであろう。彼らが本格的に活躍しはじめる時期、即ち、一九〇〇年代は、大韓帝国の末期に当り、朝鮮半島の各所で所謂愛国啓蒙団体が活動を始める時期に当るが、これに符合する形で、金祺中は大韓協会[13]、金祺中は湖南学会[14]に、それぞれ名を連ねている。大韓協会は、權東鎮・南宮濬等、ソウル在住の知識人が結成した、大韓自強会の流れを汲む団体であり[15]、また、湖南学会は姜曄・白寅基等、湖南（≒全羅道）出身ソウル在住知識人が作った団体である[16]。

8 金容燮「韓末日帝下의 地主制」,『韓國史研究』【韓国】19號(1978年), 70ページ。
9 『韓國科挙史』, 225ページ。
10 『따시 쓰는 東亜日報史』, 29ページ以下。
11 金泳模『韓国支配層研究』, 一潮閣【韓国】, 1982年11月, 107ページ以下。
12 金容燮「韓末日帝下의 地主制」に詳しい。
13 同論文, 79ページ。
14 박찬승「한말 호남학회 연구」,『國士館論叢』【韓国】第53輯（1994年8月）, 各所。
15 大韓協会については、李鉉淙「大韓協会의 組織과 活動에 관한 性格」, 趙恒來編『1890年代의 愛國啓蒙運動研究』, 亞細亞文化社【韓国】, 1993年5月、等。
16 湖南学会については、金熙泰「湖南學會의 組織과 活動」, 趙恒來編『1890年代의 愛國啓蒙運動研究』、また、先述、박찬승「한말 호남학회 연구」、柳東善「開化期 湖南學會의 教育活動에 關한 研究」, 中央大學校【韓国】碩士学位論文（1990年8月）、等。尚、金性洙の妻の父、高鼎柱はこの学会の初代会長である。

後に東亜日報を始め各所から出版されることとなる蔚山金氏を巡る各種の伝記はじめ多くの既存研究においては、金性洙等の思想的背景をみる上で、これら愛国啓蒙団体と金性洙の二人の父 － 即ち、養父と生父 － との関係を重要視しているものが多い。しかし、詳しく見て行くなら、金祺中・暻中がこれらの団体に必ずしも積極的に関わっていたのではないことを、我々は容易に知ることができよう。つまり、金祺中は、大韓協会の会員名簿に名を連ねるだけの平会員に過ぎず、彼が積極的にこの団体と関わった形跡はなく、また、金暻中は確かに湖南学会の評議員にこそ名を連ねていたが、彼は自らが約束した、この団体への出資を実際には行っていなかった[17]。何れにせよ、両者はともに自らと関係を有した団体と積極的に関わっていたとは思えない。

勿論、その理由として、この段階では朝鮮社会における蔚山金氏一族の威信が、後の金性洙の時代と比べて大きくなかったことを、挙げることはできよう[18]。しかし、先述のように、彼らの財産規模は、一九一一年までには、ソウル在住の朝鮮貴族等と並ぶ、半島の最富裕者の一人[19]として挙げられるまでになっており、それと五年ほどしか遡らない時期においても相当な規模の財産を保有していた可能性が強い。当時の愛国啓蒙団体は、そのほぼ全てが活動資金難に喘いでおり、それは大韓協会と湖南学会においても例外ではなかった[20]。本当に、彼らがこのような運動に積極的であったのであれば、彼らの果たし得る役割は大きかった筈であるが、彼らの活動はそこまで及んでいない。

それでは、何故に彼らはこれら愛国啓蒙団体の運動に消極的であったのであろうか。まず第一に挙げられるのは、彼らの在京両班層への不信であろう。例えば、金暻中は、後に金性洙が中央学校を入手する際に、次のように考えたという[21]。

『子供』にそのような大事業を任せようと

17 박찬승「한말 호남학회 연구」，163ページ。彼は100円の納付を約束したがこれを履行していない。このようなことは、当時の地主会員に一般的に見られたこと（박찬승によれば地主会員のうち、会費を納入したのは2名、計270円に過ぎない）であって、同論文151ページによれば、初代会長高鼎柱さえも約束した300円を結局は、学会に納付しなかった。金暻中等を取り巻く人々が早期に学会活動に興味を失っていたことを知ることができよう。

18 この段階では彼らは有力な地主の一人ではあったが、その地位は他から隔絶したものではなかった。例えば、박찬승「한말 호남학회 연구」，163ページ、湖南学会地主会員の資産表を参照のこと。また、彼らは地主ではあっても、ソウルでの発言権は小さかった。そのことは、大韓協会における金祺中の位置からも知ることができる。

19 一九一一年の『時事新報』には、半島における、十大資産家の一人として金暻中の名前を見ることができる。他の九名は、민영휘・송병준・박영효・김잔섭・최현식・장길상・이윤용・민병석・정재학であり、全て甞ての王朝高官、若しくは併合に関係ある者である。金暻中と蔚山金氏の特異な地位を知ることができるであろう。これについては、『따시 쓰는 東亜日報史』，32ページによった。

20 この点については、趙恒來編『1890年代의 愛國啓蒙運動研究』の各所。

21 仁村紀念會編『仁村 金性洙傳』，同紀念會【韓国】，1976年2月，102ページ。

するソウルの名士とか言う連中は信用できない。必ず、間に何者かが居て、息子を誑かしているに違いない。

間接的にではあるが、ここに表明されているのは、「ソウルの名士」に対する不信の念である。彼にとって、ソウルの名士とそれを取り巻く連中は有象無象の輩であり、無条件に信頼できる者である、とは看做されていなかった。少なくとも、そこには伝統的な在京両班支配層に対する、畏敬や信頼の念はみられない。

これと表裏一体にあるのが、この一族のもう一つの特色である、経済に対する着実な志向、とでも言うべきものである。今日まで、金性洙やその実弟金季洙の伝記は各種出ているが、これらの中に共通する特色は、そこにおいて父祖の特性として強調されるのが、経済的なもの、即ち、「倹朴」である、ということであろう[22]。「倹朴」は確かに儒教的徳目の一つではあるが、通常、より観念的な徳目が強調される韓国の伝記において、この徳目が他よりも強調されることは、この一族の特徴と言えよう。

このような一族の経済的な志向は、例えば、金祺中が定めたという、次のような家訓からも知ることができる。参考に挙げておくなら、それは次のようなものである[23]。

一. 事に当りては公正名大であれ、人に対しては春風和気であれ。
二. 量入計出して初めて、民富国強が可能であることを銘記すべし。
三. 自己に厚き者は、他者に厚くすることはできぬ。
四. 生活に規道を立て、朝鮮産を愛すべし。

注目すべきは、第二の家訓であろう。当時の朝鮮の富国論の多くが、観念的な段階に留まっていたのに対し、この金祺中の家訓は厳格である。注意すべきことは、ここで言われているのが、単なる「殖産興業」ではない、ということである。「量入計出」、即ち、歳入と歳出が厳格に管理されるべきこと、実はこれこそが多くの愛国啓蒙団体に欠けていたことであった。多くの愛国啓蒙団体は、会員からの出資金により運営されていたが、当然のことながら、それは出発当初こそ設立者達の出資した資金により期待された運動を行うことが可能であったが、やがて、当初の出資金が食い潰された結果として、活動を沈滞させていく、という共通の道筋を辿っている。それは即ち、彼らが自らの活動において「量入計出」していなかったことを意味している。

22 典型的な例は、繰り返し強調される、金堯筴の妻、鄭氏の逸話である。先述『仁村 金性洙傳』，44ページ、權五琦編『仁村 金性洙』，東亜日報社【韓国】，1985年4月，34ページ。これらによれば、「鄭夫人のこの勤勉・節約の気風は今日までの金氏門中に深く根を下ろしており、それが金氏門中の原動力となっている」。このような逸話は勿論、金性洙自身についてもある。幼年時代のものについては、『仁村 金性洙傳』，47ページ、1920年代のものについては、金昌煥編『韓國政界七人傳』，韓國文化社【韓国】，1969年12月，64-65ページ。

23『仁村 金性洙傳』，45ページ。

金祺中の座右の銘の背景には、このような当時の愛国啓蒙団体の実態があるのであろう。

この点を理解すれば、何故に、金暻中等が「ソウルの名士」達に対して不信の念を抱き、これらに対する出資に消極的であったかも推察することができよう。即ち、「ソウルの名士」達の経済観念 － より正確に言うなら、放漫な団体経営の在り方 － こそ、この一族の最も忌み嫌うところであり[24]、金暻中はそのような彼らの団体運営に対して、否定的であった。「結果のわからない事業に多くの財産をつぎ込むこと」、これこそが彼らの尤も忌避するところであったのである[25]。この背景には、「ソウルの名士」とは異なり、短期間に巨大な富を築き上げてきた、彼らの経営者としての経験があろう。

彼らの特色はここにこそあった。そして、そのようにして培われて来た財産と、それを支えた経済観念こそが、後の金性洙による、巨大な湖南財閥と、それを背景にした「東亜日報人脈」へと繋がって行くことになる。そこで次に、その金性洙による、啓蒙運動とその在り方について、具体的に見てみることとしよう。

第二節　金性洙の登場と、人脈形成

金性洙が全羅道古阜郡富安面仁村里にて生まれたのは、一八九一年であるから、既に金堯筴が第一線を退き、金祺中・暻中兄弟が実質的にこの一族を主導していた時期に当る。金性洙は、金暻中の四男として生まれ、三才の時に、それまで子供のなかった金祺中の嗣子として出系している。度々、彼に「二人の父親がいた」と言われる所以であるが、本稿においてこのような彼の出生とその背景について、触れておくべきことは、第一に、彼が生まれ育った時期が、既にこの蔚山金氏一族が、大地主としての地位を確立していた時期であること、第二に、韓国近代史においては、その時期が朝鮮王朝の末期から大韓帝国期に当たり、既に日本が韓国植民地化へと着実にその歩を進めていた時期に当たることであろう[26]。

第一の点、即ち、大地主の子弟として生まれ育ったことの結果、このソウルから遠く離れた土地において、彼の父祖が与えられなかったであろう最高水準の教育が、金性洙には与えられることとなった。彼が学校生活を始めたのは、七才の時、伝統的な書堂教育においてであったが、一六才の時には、自らの妻家のあった昌平に移り住み、ここで一三才の時に結婚した妻の父、高鼎柱の開いた英学塾で学んでいる[27]。この英学塾は、高鼎柱が自らの次男光駿と金性洙に、新学問を教える為

24 金暻中のこのような姿勢については、金相厦編『秀堂 金季洙』，三養社【韓国】，1995年10月，25ページ。「優れた性品の所有者である芝山は、自己の財産を運用するに際して他人に損害を与えたことはなかった。あちこちから金を借りてでも、無理に金を使おうとする、人となりではなかった。」

25『仁村 金性洙傳』，101ページ。

26 金性洙の幼年時代については、先述他の金性洙の伝記参照。

27 この英学塾については、金性洙の各種伝記、また、박찬승「한말 호남학회 연구」，150ページ。

に、特別に開いたものであり、この点だけを取ってみても、彼が如何にこの在地社会において、特別な位置にあったかを知ることができよう。

尤も、大地主の子弟として生まれ育ったことが彼に与えた影響はこれだけではなかった。即ち、この在地社会で特別な存在であった彼は、このような環境を通じて、後に彼の側近として活躍することとなる人物達と交友関係を結ぶこととなる。宋鎮禹・白寛洙等がそれであるが、後の関係に見られるように、金性洙と彼らとの関係は、友人であると同時に、時に経済的援助をも行う、パトロンでもある、という類の関係であった。このことはそれまでの地方出身の名士達が、科挙受験の為ソウルに幼年時代に出、その「ソウルの名士」達との人間関係の中で、寧ろ、従属的な位置に留まることを余儀なくされたことと一線を画している。経済的には十分な余裕があった筈の二人の父親が、金性洙にソウルでの教育を与えなかったことからも、我々は、金祺中・暻中等の「ソウルの名士」達に対する姿勢を、再び確認することができよう。

次に、時代背景が彼に与えた影響について触れてみることとしよう。この時期、金性洙は全羅北道の狭い地域を自らの生活基盤としていた。従って、我々がここで注目しなければならないのは、全体的な韓国近代史の流れも然ることながら、この時代、この地方がどのような状態に置かれていたか、であろう。この点において、容易に指摘できることは、この全羅北道古阜の地が、所謂東学農民戦争から第二次義兵戦争に至るまで、一貫して烈しい韓国近代史の激動に晒された土地である、ということである。この点について、今日までの金性洙とその一族の伝記資料は多くを語ることはないが、我々は、金性洙がこの土地を離れた翌年である一九〇九年、第二次義兵闘争の中、金祺中が保蔵していた賭租百石が義兵達によって「執留」された、という記録を見ることができる[28]。詳しい事情は不明であるが、この時期、湖南地方の多くの地主達が自らの財産を義兵に「差押」されており、この金祺中の事例も恐らくその一つであったと考えるのが適切であろう。

一言で言うなら、彼は大地主の子弟として特別な環境の中育ち、その環境は、義兵運動に代表されるような従来型の農村に基盤を置く運動とも、また、伝統的な在京両班達のそれとも一線を画するものであった。時代が彼の選択に与えた影響について、もう一つ付け加えておくなら、先述のようにこの時代には、既に日本が朝鮮半島において、有力な列強の一つとして登場してきている、ということであろう。彼が英学塾に通いはじめた時期は、既に日本が韓国を保護国化していた、所謂統

28 洪淳權『韓末 湖南地域 義兵運動史研究』, 서울大學校出版部【韓国】, 1994年11月, 210ページ。また、この時代の湖南地域の地主と義兵運動の一般的な関係については、同書の各所、及び、박찬승「한말 호남학회 연구」, 146ページ。

監府時代にあたり、日本の影響力は、商人等を通して、着実にこの地方にも浸透して来ていた。事実、金性洙の学んだ英学塾のカリキュラムには、英語・算数等ともに、日本語が入っていた[29]。

このような時代に生まれ育った金性洙の日本に対する感覚は、当然のことながら、彼の父祖達とは、異なるものであった。これを巡っては、日本製品を巡る、彼の祖父金堯筴と彼の間の、興味深いエピソードが残されている。金堯筴は日本製品を「三綱五倫を乱すもの」として近くに置くことさえ許さなかったが、そのような日本製品を幼年期の金性洙はあれこれ眺め、その用途を考えて遊んでいた、という。彼にとって日本商人は、「侵略の触手であると同時に、新文明の伝達者でもあった」[30]。

ソウルへの疑念と、日本への一定程度の親近感。それは彼をして、次なる高等教育受容の場として、ソウルよりも東京を選ばせることとなった[31]。一九〇八年のこの渡日は、彼に日本の「新文明」の力を一層実感させることとなった。東京に到着した彼は、正則英学校を経て、一九一〇年四月には早稲田大学予科に入学することとなる。従って、韓国併合はちょうど彼が予科に通っていた頃のことであることとなる。彼は東京でも、やはり、大地主の子であった。後に東亜日報・韓国民主党の両輪として活躍する宋鎮禹[32]・張德秀[33]は共に、東京在住時代、金性洙から金銭的援助を受け、学業生活を続けている。また、彼は一時期、市ケ谷に、家を一件借り切り、宋鎮禹・梁源模（後の東亜日報専務）・鄭魯湜等と共に生活していたが、当時、この家は朝鮮人留学生の溜まり場になっていたとも言う。この他にも彼に資金的援助を受けていた朝鮮人留学生は多数いたようである[34]。一言で言うならば、金性洙はこの時期の朝鮮人留学生達の間のパトロン的存在であり、自然、彼の周りには一定の人脈が形成されて行くこととなった。先述の張德秀は勿論、玄相允・崔斗然・梁源模（以上、早稲田大）、朴容喜・金俊淵（以上、東京帝大）、李康賢（蔵前高工）等は、その後、東亜日報や京城紡織等で、金性洙の傍らで活躍することとなる人物であるし、また、後に時に彼と同時代の有力な民族運動家ととなり、時に金性洙と協力関係を持った、曺晩植・金炳魯・玄俊鎬・趙素昂（以上、明治大）、金度演（慶應大）、兪億兼・金雨英（以上、東京帝大）との関係もこの時期に始まるものである。また、李光洙や朱耀翰（共に後に東亜日報編修局長を歴任）が初期の自らの文学活動の舞台とした、学友会もこの時期、彼らの手によって作られている[35]。

29『仁村 金性洙傳』，49ページ。
30『仁村 金性洙傳』，59ページ。
31『秀堂 金季洙』，37-41ページ。金性洙は、宋鎮禹が推奨するソウルへの留学と、白寛洙が主張した日本への留学の両者の中から、自らの強い意志で、日本への留学を選択している。彼は宋鎮禹に対して、こう述べたという。「いや、ソウルに行くのではなく、我々は日本に行くのだ!!」。
32『仁村 金性洙傳』，75ページ。
33『仁村 金性洙傳』，78ページ。
34『仁村 金性洙傳』，78ページ。
35 この当時の金性洙等の交流については、金性洙・宋鎮禹・張德秀等の伝記の各所、また、박태균「해방 직후 한국민주당 구성원의 성격과 조직개편」，『國士館論叢』【韓国】第58輯（1994年11月），94ページ以下。

このようにして形成されてきた金性洙とそれを取り巻く人脈は、彼の政治的財産となり、やがて、それは一つのグループへと結合して行くこととなる。即ち、「人脈としての東亜日報グループ」がそれである。

それでは、このような金性洙を中心とする人脈と彼の一族の資産は、どのようにして具体的な政治的・経済的集団へと転化されていったのであろうか。次にその点について見てみることとしよう。

第二章　東亜日報グループの登場

第一節　中央学校入手

六年間の日本留学は、金性洙をして、近代化における教育の意義を再確認させることとなった。ここにおいて、偶然の産物であったにせよ、彼が一高や東京帝大ではなく、早稲田大に留学したことは、重要な意味を有していた。この点について、彼は以下のように述べている[36]。

しかしながら、私は、自分が［当時、早稲田に通った学生達の多くがそうであったように］大隈伯を尊敬する人間の一人であることは否認しない。私は彼に対して、思想と学識よりは、まず、彼の、世の中の為に献身する、憂国経世家としての志操に尊敬と仰慕の念を抱いていた。［中略］この校門から後日、日本憲政を主導することとなる数百の有名な政治家と、社会各方面の人材を輩出させ、日本の文明を建設した国家的功労を考えるなら、その彼の姿勢には敬服するばかりである。大隈伯の全ての政治的功労が忘れ去られた日にも、早稲田大学を通して教育事業家として活躍した大隈伯の功績は、万古不朽であろう。

尤も、朝鮮の名望家や運動家達が、自らの政治的・思想的表現の一方法として私学を作ることは、大韓帝国末期に、広く見られた現象でもあった[37]。このことを考えるなら、或は、このような大隈の姿勢が彼に与えた影響についても、彼が日本留学に赴く以前における、朝鮮半島の「私学熱」を考えて理解することが重要であるのかもしれない。何れにせよ、日本を離れることとなる一九一四年の段階で、金性洙の頭にあったのは、まず、「朝鮮の早稲田大学」を作り出すことであり、それを通じて朝鮮の近代化に資することであった。

帰国した金性洙は早速、この課題に取り組むこととなる。当初、彼が考えていたのは、ちょうど大隈がそうしたのと同じように、自らの手で学校を創設することであった。しかし、この「白山学校」という校名まで決まっていた、私立学校新設計画は、総督府の不許可により失敗する。金性洙は次の策を講じることを余儀なくされた訳であるが、幸いなこ

36 金性洙「大學時代의 學友들」,『三千里』(1935年)。『仁村 金性洙傳』, 87ページ、よりの再引用。尚、［ ］内は筆者。以下、同様。

37 こうした「私学熱」については、呉天錫『韓国近代教育史』, 高麗書林, 1979年10月, 181ページ以下。

とは、新たなる策は、彼が自ら考えを巡らせるまでもなく、むこうから転がり込んで来ることとなる。即ち、当時のソウルの最名門私立学校であった、「中央学校」が自らの経営難を理由に、金性洙に学校再建を依頼してくるのである。これであれば、改めて総督府から学校設立許可を獲得する、という問題も回避できる。早速、金性洙はこの話に飛び付くこととなる[38]。

ここで、中央学校とそれを取り巻く当時の私立学校の状況について説明しておく必要があろう。既に述べたように、大韓帝国末期には、朝鮮全土で「私学熱」が盛んであり、様々な団体や有志が、朝鮮各地に私学を創設している。これらの多くは、所謂「学会」、即ち、在地・在京の知識人達 － その多くは伝統的な王朝知識人の流れを汲んでいる － のグループによって設立・支援されていたが、日本統治が始まったこの時期には、多くの学会それ自体がそうであったように、その傘下にある私立学校の多くも、深刻な経営難に喘いでいた。そして、中央学校もその例外ではなかった。この中央学校は、在京知識人達が作った畿湖興学会の作った畿湖学校と、同じく在京知識人達のもう一つの団体であった興士団の作り上げた隆熙学校の二つの流れを汲むものであり、より正確に言うなら、経営難に喘ぐ二つの学校が、経営合理化の為に合併し、誕生したものであった。中央学校の「中央」とは、その経営母体である、「中央学会」に由来していたが、この「学会」もまた、財政難に苦しむ様々な「学会」が、自ら自身の経営合理化の為に大同合併し、作り上げられたものであった。中央学会に合流した学会の中には、先述の畿湖興学会や興士団は勿論、嶠南学会や関東学会、更には、金暻中も評議員として参加していた湖南学会等が含まれている[39]。

一言で言うなら、中央学校とは、当時の伝統的知識人層の最大の集合体によって経営される学校であった。しかし、以上のような合併に合併を重ねたにも拘らず、一四年当時の中央学校の経営難は依然深刻であり、そこで、白羽の矢が立てられたのが、湖南の大富豪の子弟であり、教育事業に関心を有しているという、金性洙であった。尤も、彼ら、伝統的知識人達と、金性洙の間には、中央学校再建を巡って、大きな思惑の違いがあった。この点について、『仁村 金性洙傳』は次のように述べている[40]。

内部事情を知った仁村［金性洙の雅号］は中央学校の無条件引継を要求した。この要求は学会の解散を意味していた。学会の意図はこれとは異なった。学会はそのまま存続し、仁村は出資者として学会に加盟し、学会の運営を任せる。それが学会側の意図であった。しかし、仁村にはそれはできなかった。中央学校の問題は、学校自体にあるのではなく、学会の構成が複雑であり、また、非能率的で

38 このような経緯については、『仁村 金性洙傳』，91ページ以下。

39『仁村 金性洙傳』，98-99ページ。

40『仁村 金性洙傳』，100ページ。

あったことにあるのであり、それ故、学会をそのままにしたまま、出資だけ行うことは無意味であった。

資金は出させるが、主導権は自分達が握る。中央学会側が金性洙に求めていたのは、従来の地方の富豪達と、彼ら伝統的知識人層の間に良く見られた関係であった。先述のように、中央学会は、巨儒・金允植を会長に戴き、その下に李商在・柳瑾・兪星濬等を主要メンバーとする、当時の朝鮮一流知識人の集団であり、対して、金性洙はこの時、僅か齢二五の弱輩に過ぎず、両者の間には、当時の社会における「威信」において、大きな差があったということができる。この点を考えるなら、彼ら伝統的知識人達が、ただの「地方富豪の子弟」に過ぎない金性洙に、自らの意に従うことを求めたのは、ある意味では当然であったとも言うことができよう。にも拘らず、つきつけられた金性洙の学会に対する死刑宣告にも等しい要求は、彼ら、従来の朝鮮社会の重鎮達を驚愕させたに違いない。しかし、学会と中央学校は、既に「存廃の岐路」に瀕していた。結局、名望家達は、金性洙の要求を呑み、中央学校を全面的に彼の手に委ねることとなる。それは、朝鮮社会における伝統的知識人層の権威が、「経済」の力に屈伏した瞬間であった。

中央学校の獲得は、結果として、金性洙に単なる学校経営の夢を実現させるだけではなく、彼をして、伝統的知識人の人的ネットワークを継承させ、一躍、彼をしてその頂点に立たしめることとなった。一九一九年、三一運動が展開されるに当たって、一躍、金性洙と中央学校が何故に、「三一運動の策源地[41]」と成り得たかを考える上で、この点は見落とされてはならないであろう。彼らは、最大のネットワークの一つを自らの傘下に収めていたのである。

「経済の力」による支配権の獲得。それはこの東亜日報グループを理解する上での最大のキーポイントである。しかし、それはこの段階では、まだ、その出発点であるに過ぎない。それならば、その「経済の力」と東亜日報グループのその後の形成過程はどのような関係にあったのであろうか。次に、この点について具体的に見てみることとしよう。

第二節　経営権独占と「東亜日報人脈」の成立

前節で中央学校について見てみたように、金性洙が企業・法人等を経営するに当たっての一貫した方針は、「自らが経営権を独占する」、ということであった。このことは、従来の伝統的知識人中心の「学会」等に対し、それまでの在地地主層が、単に金銭的寄付を行うに留まっていたこととは、明らかに一線を画している。繰り返しになるが、この金性洙と蔚山金氏において、「経済」の力は、初めて伝統的知識人層の「権威」に優越した、と言うことができる。

41『仁村 金性洙傳』，119ページ。尚、今日、同名の碑が、中央学校敷地内に建てられている。

それでは、このような金性洙の「経営権」はより具体的にはどのような形で、個々の団体において現れたのであろうか。まず、この点について指摘できることは、これが金性洙の絶対的な人事権として現れた、という事実であろう。このことが最も明確に現われているのは、今日の高麗大学校の前身、普成専門学校引き受けに際しての金性洙の要求においてである。金性洙は引き受けに当たって、次のような三条件を示したという[42]。

一．現在の理事･監事は総辞職すること。
二．後任の理事･監事は金性洙の指名によって選任されること。
三．財団法人の評議会を廃止する為の寄付行為規定を改正すること。

金性洙が自らの支配下に置く以前の普成専門学校の規定においては、多額の寄付金を行った者には、終身理事としての待遇が保証されることが定められていた。第三の条件は、そのような従来の規定を撤廃し、これら、金性洙以前において終身理事の地位を獲得していた者達を例外なく退任させるべく、金性洙が示した条件である。このような条件からもわかるように、金性洙が様々な団体を引き受けるに当たって、要求したのは、彼の団体に対する絶対的な支配権であり、それは具体的には、金性洙による絶対的な人事権として現れていた。今日まで、金性洙については、彼が表面に出ることを嫌う「寛裕と寛恕の人格」の保有者である、という評[43]が支配的であるが、以上のことを理解した上で言うなら、彼には敢えて、社長や理事長といった「表の職務」に就く必要はなかった、と言う方が適切であろう。全ての理事や取締役が彼によって自由に選任されるなら、それらの職は全て名目的なものであり、金性洙が敢えて、法的責任を負わせられる危険を負ってまで、表の職務に就く必要がある筈はなかった。

金性洙が日本統治時代に支配することになる様々な団体、即ち、中央学校・普成専門学校・京城紡織・東亜日報・三養社等々において、彼がこれを支配することになる形は大きく二つに分けることができる。その第一の形は、これまで述べて来たように、従来からある伝統的知識人層が設立した諸団体が経営難に陥り、これを助ける代償として、金性洙がこれらの団体の絶対的な支配権を得る、というものであった。この形の支配権入手については、既に中央学校と普成専門学校について見た通りであるが[44]、これらの団体を引き継ぐことにより、金性洙は創業の困難を回避すると同時に、一躍、当時の朝鮮社会において、重要な地位を占めることが可能となっていた。これと同じ形の入手経緯を辿ったものとしては、後に京城紡織を設立する為の前段階として重要な、京城織紐の入手がある。

42『仁村 金性洙傳』，342ページ。
43『仁村 金性洙』，387ページ。
44 普成専門学校の成り立ちとその金性洙による入手についての詳しい内容は、高麗大學校六十年史編纂委員會編『六十年誌』，高麗大學校【韓国】，1965年5月。

金性洙が団体を自らの支配下に収めるに当っての第二の形は、より単純に、彼自身が直接、団体を設立する、というものであった。代表的な例は京城紡織と東亜日報であるが、我々がここで注意しなければならないことは、この両者の何れにおいても、最初に設立そのものを構想したのは、金性洙ではなかった、ということであろう。事実、京城紡織においては、日本にて紡績学を専攻した李康賢が構想の生みの親[45]であったし、東亜日報発行を金性洙に働きかけたのは、それまで総督府系朝鮮語新聞『毎日申報』にて、編修部長をしていた、李相協であった[46]。両者は、共に当時の朝鮮における数少ないその道のプロフェッショナルであり、それぞれの世界で自らの主導による「朝鮮人の為の」事業実現を考えていたが、専門家としての技量はあっても、自前の資金を保有しておらず、自らの「夢」を実現するに当たって金性洙の経済力を利用したのであった。

このような経緯を辿った経過、第一のグループに属する諸団体とは異なり、京城紡織と東亜日報においては、当初、李康賢と李相協という二人の「専門家」が大きな力を振るうこととなった。事実、京城紡織の初代支配人は李康賢であり、また、東亜日報の初代編修局長兼政治部長兼発行人は李相協であった。この意味で、金性洙のこれらの団体に対する支配力は、少なくともその初期においては、中央学校や普成専門学校のそれに比べて弱いものであった[47]。

しかし、金性洙はこれらの団体においても、次第に支配権を強めて行くこととなる。京城紡織においてはその経緯は比較的単純であった。設立間もなく、日本への工場機器買い出しに出かけた李康賢は、一攫千金を狙って、自らに与えられた資金を「三品市場」につぎ込み、その投機行為の失敗の結果、京城紡織の財政に大穴を開けてしまうのである。結局、この損失は、金祺中が自らの土地を担保に、朝鮮殖産銀行から借入を行い、その資金を金性洙に提供することにより、穴埋めされるのであるが、この李康賢の自失は、結果として、彼から支配人としての地位を失わせ、その地位は、金性洙の実弟である、金季洙によって取って代わられることとなる。金性洙に自らの自失を救われた形となった李康賢は、その後も京城紡織の重役として留まることとなるが、「このことがあった後、会社のこととなれば、全てを捧げる献身的な京紡［京城紡績の略称］人となった」[48]。

金性洙の団体に対する支配の意志と、より

45 京城織紐入手と京城紡織設立における、李康賢の役割については、京紡七十年編纂委員會編『京紡七十年』，同委員會【韓国】，1989年12月，62ページ、また、權五琦編『仁村 金性洙』，135ページ以下。

46 東亜日報設立初期における、李相協の主導的な役割とその経緯については、金相万『東亜日報社史』巻一，68ページ以下。但し、後に述べるように、その後李相協は、宋鎮禹と対立し、東亜日報を離れることとなる為、この記述でもその役割は或いは過小評価されているのかも知れない。大韓言論人會編『韓國言論人物史話』8·15前編（上），大韓言論人會【韓国】，1992年12月，436ページ以下。

47 各々、『京紡七十年』，『東亜日報社史』巻一、参照。中央学校と普成専門学校においては入手当初から金性洙や彼の側近が要職に就いていたことを想起されたい。

48 『京紡七十年』，71ページ。

鮮明に衝突したのは、李相協であった。東亜日報は当初、朴泳孝を名目的な社長に戴き、その下に発行人兼編修局長として、実質的な新聞発行・編修に李相協が当る形となっていた。朴泳孝、そして、早々に社長の職を退いた彼の後を継いだ金性洙自身も、このような李相協の地位には直接的に手を出しはしなかったが、その状況は金性洙が社長の職を退き、宋鎮禹がその後を継ぐことによって大きく変化することとなる。当時の李相協は、「新聞を知る者はこの朝鮮に自分以外にいない[49]」という強い自負を有していたが、この彼の上に民族の「元老」でも、資金提供者でもない、ただの「新聞の門外漢」が座ったことは彼のプライドを著しく傷つけることとなった。結局、宋鎮禹と李相協の対立は、所謂「食堂園事件」を契機に表面化し、李相協は東亜日報を離れることとなる。その後彼は、朝鮮日報編修顧問を経て、中外日報を創刊することとなるが、東亜日報のような強力な経済的基盤を欠いたこの新聞は、やがて経済的に破綻し、彼は毎日申報に「恥辱の復帰[50]」することを余儀なくされる[51]。それは金性洙の経営権が、新聞編修の「専門家」を弾き飛ばしていった過程であった。

何れにせよ、本稿において重要なことは、以上のようにして、金性洙が自らの出資した団体の絶対的な人事権を獲得していったことであろう。金性洙はこのような人事権を基に、自らが既に交友を結んでいた人々を、順次配置して行くこととなった。ここに「人脈としての東亜日報」は、実態を伴う一つの集合体に結実される。結果、これらの団体の理事・取締役等は、全て先の時代に形成された金性洙の系列の人脈によって占められることとなる。表1はこれを示したものであるが、ここにおいて注目すべきは、このようにして金性洙によって起用された人々が、何れも彼の同世代人であり、且つ、金性洙とその故郷においてか、若しくは日本留学時代に交流を結んだ者達であった、ということであろう。そして、その人脈はやがて、解放以後の政局において、韓国民主党の主流派となって立ち現れて来ることとなる[52]。彼らの多くは、金性洙に比較されるような父祖伝来の巨大な資産も、また、従来の両班知識人層のような絶大

49 『東亜日報社史』巻一，233ページ。

50 『韓國言論人物史話』8·15前編(上),443ページ。

51 尤も、李相協が東亜日報を離れた後にも、東亜日報においては、彼に匹敵する編修・文章能力を有する人材が、新聞運営の為に必要であった。代って抜擢されるのが、臨時政府と対立し、その機関紙『独立新聞』を離れて、半島に戻っていた、李光洙と朱耀翰であった。しかし、やがて彼らも、金性洙からの自立を目指し、東亜日報を離れることとなる。『韓國言論人物史話』8·15前編（上)、401ページ以下（李光洙)、及び、『韓國言論人物史話』8·15前編（下)，大韓言論人會【韓国】，1992年12月，179ページ以下（朱耀翰)。また、「나의 이력서」21,『韓國日報』【韓国】1975年10月7日。後日の朱耀翰の述懐である。また、同じ「나의 이력서」19,『韓國日報』1975年10月3日には、宋鎮禹の酒癖と、金性洙の「編修には干渉しなかったが、経費削減には気を使っていた」という経営方針についての、指摘がある。

52 この点については、박태균「해방 직후 한국민주당 구성원의 성격과 조직개편」，90-99ページをも参照のこと。

な権威をも有さぬ者達であり、主として、金性洙の経営する様々な団体の中で、自らの生活の糧を得る者達であった[53]。言い換えるなら、彼らはそれぞれ、自らが担うこととなった、経営・編修・教育・文学等々における専門知識こそ有していたが、金性洙に挑戦する背景も意志も有さぬ人々であったのである。

「人脈としての東亜日報グループ」はこうして形成され、一つの実体へと結実することとなった[54]。日本統治期、そして、独立以後の第一共和国期に「東亜日報グループ」と目された人々は、ほぼ例外なく、このようにして金性洙によって、見出され、彼の経済力の庇護の下、その実力を発揮した人々であった。

全ては金性洙の絶対的な人事権の下、作り出されたものであった。それなら、彼はこのような経営権の独占をどのようにして維持していったのであろうか。次にその点について見てみることとしよう。

第三節　土地から総督府系資金へ

「人脈としての東亜日報グループ」は金性洙の経営権の下に作られた。しかし、それだけならこの人脈は、彼の「経営」の失敗と共にその勢力を失墜させ、やがては － 大韓帝国末期の学会等と同じく － 解体することを余儀なくされる可能性があったであろう。言い換えるなら、「東亜日報グループ」が日本統治期、そして、第一共和国期において、一定の影響力を保ち得た背景に、このグループの経済的安定があったことは見逃されてはならない。それでは、このグループのこような経済的安定は如何にして齎されていったのであろうか。また、その基盤はどこにあったのか。

まず、第一に指摘できることは、それまでの多くの政治的活動を行ってきた団体と明確に異なり、このグループには採算性の高い「実業部門」が備わっていた、ということであろう（図1）。既に幾度か述べてきたように、大韓帝国期、そして、日本統治期の多くの団体は、設立当初こそ、その豊富な寄付金により、運営が可能であったが、やがて、それを食い潰し、その活動は沈滞して行くこととなった。これに対して、東亜日報グループには、提供された資金を運用する場があった。言うまでもなく、京城紡織はこのような資金運営の中心的な舞台であったが、このような実業部門の経営を以て諸団体運営の資金を確保しようという姿勢は、既に我々は中央学校入手の過程においても見ることができる。注意すべきは、金性洙が中央学校を入手する際

53 この点については、彼らの、東亜日報グループの諸企業・団体における出資等の額を見ても知ることができる。京城紡織の初期の大株主であり、財団法人中央学院の主たる資金提供者の一人であった、朴容喜を例外とするなら、彼らの中に、これらの諸企業・団体に大株主等の位置にいたものはいない。その意味で彼らと、金性洙の関係を対等な関係と言うことは難しい。

54 これら東亜日報グループの傘下に収まった人々の思想的傾向については、これまで様々な形で論じられて来たが、筆者はこれを簡単に論じることは難しいと考える。何故なら、日本統治期の東亜日報に関わった人物の中には、李光洙・朱耀翰のように総督府と密接な関係を有した人々もいれば、呂雲亨のような「進歩的知識人」も、更には、後に南朝鮮労働党の党首となる朴憲永のような人々もいたからである。この点については、「歴代社員名録」、『東亜日報史』巻一，418-433ページ。

の経済的支援が「資金の供出」によってではなく、彼の一族が所有していた農場、より正確に言うなら、これらの農場からの利益の供出、によって行われた、ということであろう。つまり、中央学校とは、既に、蔚山金氏一族の「実業」とその経営手腕によって支えられる存在であったのである。

しかし、このような土地供出とその経営によるグループ維持は、「資本としての東亜日報グループ」、即ち、後人の言う「湖南財閥」が経済的に拡大して行くに連れ、次第に不十分なものとなっていった。事実、一九二〇年代から解放までの間に、金性洙一族が所有する土地の規模は、約八倍（1.8万石→15万石）にしかなっていないが[55]、対する京城紡織の資本金規模は一三倍（100万円→1300万円）[56]、借入金においては実に五百倍以上（8万円→4200万円）[57]になっており、これらの経済的拡大を全て蔚山金氏一族所有の土地資本によって支えることは事実上不可能であった。

ここにおいて金性洙等が採用した手段は、次の二つであった。第一は、京城紡織や東亜日報の「一人一株運動」で良く知られているような、株式の公募（例えば、京城紡織については、表2）である[58]。一見、このことは金性洙による経営権独占と相反することのように思えるが、金性洙とその一族はこの株式公募を有効に用いることにより、適宜、自らの経営する企業の規模拡大を実現しつつ、同時に、自らへの資本集中の度合を寧ろ増していった。彼らは、当初から、これら企業の大株主であったが、増資の際においても、現株主や、重役・縁故者への株式優先割り当てを通じ[59]、更には、一旦株式を発行した以後の株式失権手続等の手段を通じて、自らの支配権を維持・強化していった。

しかし、金性洙一族が自らのグループの経済的拡大を実現するに当って、重要なのは、これだけではなかった。表3は、中央学校入手から朝鮮戦争勃発までの間の、東亜日報グループにおける主たる資金移動を示したものであるが、ここから即座にわかることは、東亜日報グループが拡大して行くに当たっては、朝鮮殖産銀行[60]からの借入が、重要な役割を果たしている、ということであろう。この点は京城紡織の急拡大期に当る一九三〇年代以降において特に顕著である。つまり、東亜日報グループ、就中、その経済的中核であった、京城紡織とは、資金調達面においては、朝鮮総督府の殖産興業の為の政策銀行であっ

55 三養社編『三養六十年』，三養社【韓国】，1985年12月，72（1924年の数値）、及び、126ページ（同1948年）。また、金性洙一族の土地資産の内容については、金容燮「韓末日帝下의 地主制」，87ページの表、及び、『따시 쓰는 東亜日報史』，37ページ表、参照のこと。

56 表3参照のこと。また、『京紡七十年』，579ページ。

57 表3参照。

58 この株式募集に当たって、金性洙等は日本人株主の存在を排除しなかった。*Offspring of empire*、pp.78。

59 例えば、『京紡七十年』，101ページ。第二回新規株主募集の際、一般公募の占める割合は、実に、10%（4万株中4千株）でしかなかった。

60 朝鮮殖産銀行とその役割については、金玉根『日帝下朝鮮財政史論攷』，一潮閣【韓国】，1994年1月、20-22ページ。また、藤戸計太『朝鮮金融経済研究叢書』，大東學會，1922年2月，492、509-521ページ。

た、朝鮮殖産銀行をメインバンクとする企業であったのである[61]。我々はここで、何故に、多くの朝鮮人資産家が金融業務に手を染めたこの時代、朝鮮人資本最大の「資本としての東亜日報グループ」が、一九三〇年代における海東銀行を巡る幕間劇[62]を別にすれば、特に金融機関を所有したり、経営する積極的な意志を見せなかったかを理解できるであろう。つまり、それは彼らが当時朝鮮半島内最大級の金融機関と明確なパイプを有していたからなのである。

それでは、「資本としての東亜日報グループ」は如何にして、朝鮮殖産銀行との密接な関係を築き上げてきたのであろうか。この点を理解する上で我々が見落としてはならないのは、朴泳孝の果たした役割であろう[63]。従来、金性洙系企業における朴泳孝の地位については、「名目的なもの」とされるか、「総督府との接触役」とされるに留まっているが[64]、京城紡織において一九三四年まで社長を、そしてそれ以後もその死去に至るまで顧問の位置に留まり、また、東亜日報においては設立当時の社長であった朴泳孝が、それらの期間を通じて朝鮮殖産銀行の理事を同時に務めていた、という事実はもっと重く受け止められるべきであろう[65]。事実、一九三九年に彼が死亡すると、翌四〇年には、朝鮮殖産銀行から京城紡織に、中富計太という日本人[66]が監査役として派遣されており、このことからも、朴泳孝がそれまで果たしてきた役割が推定できる。

このことを理解する為には、この時代の朴泳孝の微妙な立場を説明する必要があろう。周知のように、朴泳孝は、一八八四年の甲申

61 表3にも記したように、1940年の段階で、京城紡織の朝鮮殖産銀行と、満州における同様の機関であった満州興業銀行からの融資は、合計四千二百万円にも達している。これは「朝鮮人は勿論、日本人達の間でも、このような巨額の融資を受けることの出来るものは、誰一人いなかった」。『秀堂 金季洙』、153ページ。当時における、日本政府系公的金融機関と東亜日報グループとの密接な関係を知ることができるであろう。

62 東亜日報グループは、一時期、海東銀行を入手し、これを経営しようとした時期があった。しかし、総督府の勧誘と経営難からこの経営は1938年には断念され、海東銀行は漢城銀行に合併され、蔚山金氏一族はここから手を引くこととなる。彼らによる数少ない経営失敗の例である。『三養六十年』，113ページ、また、*Offspring of empire*, pp.90。ここでは次のような、金容完（京城紡績第五代社長）の発言が記録されている。「海東は小さな銀行だった。それは多くの顧客も持たず、預金額も多くはなかった。だから、京紡が海東にのみ頼ることは不可能だった。それは小さ過ぎた為、我々は殖産銀行と仕事をしなければならなかった」。

63 朴泳孝の略歴については、例えば、大垣丈夫編『朝鮮紳士大同譜』，朝鮮紳士大同譜発行事務所，1913年12月、14ページ。

64 例えば、『京紡七十年』，67ページ、『東亜日報史』巻一，107-108ページ。

65 同様の見解を示すものとして、*Offspring of empire*, pp.98-99。Eckertも述べているように、朴泳孝の役割は「それ以上」のものであった。また、同箇所でEckertは、朝鮮殖産銀行において、朴泳孝を始めとする朝鮮人理事達の役割は大きかった、と主張している。尚、本節の内容については、*Offspring of empire*, pp.65-102とほぼ一致している。

66 中富は、朝鮮殖産銀行の審査課長であった。東京興信所編『銀行會社要録』，東京興信所，1933年5月，「朝鮮」1ページ。

政変を金玉均と並んで首謀した、一九世紀後半の朝鮮開化派の代表的人物であり、その権威は三一運動当時においても依然として、「民族代表者第一候補[67]」と目される程であった。しかしながら、一方で、彼は当の甲申政変以来、一貫して自らの開化という大目的実現の為、日本の力を利用せんとした人物であり、彼の行為は、結果として半島に日本の影響力を引き込んで行くこととなった。また、彼は併合に際しても、伯爵の爵位を受けており、所謂「朝鮮貴族」の筆頭に名を連ねる存在でもあった[68]。言わば、彼は、民族の「元老」と「親日派」の二つの顔を持つ人物であり、両者は彼の中で見事に結合していた。

何れにせよ、こういった経歴の結果、朴泳孝はこの時代、総督府にも、また、所謂民族主義陣営にも影響力を有する希有な存在となっていた。そして、金性洙等は、その朴泳孝を巧みに取り込むことにより、自らのグループ経営における潤沢な資金を確保することに成功していた。本稿において重要なことは、金性洙等が、「資本としての東亜日報グループ」を運営するに当って、朴泳孝のパイプを通じた朝鮮殖産銀行や総督府からの資金獲得を始め、当時の朝鮮社会におけるあらゆる経済的可能性を総動員して、経営の経済的健全性を維持していた、ということであろう。「資本としての東亜日報グループ」は、正にこうした経営努力の上に成立したものであり、これらの何れかを欠いても成立し得ないものであった。既に述べたように、こうした「資本としての東亜日報グループ」の下に、「人脈としての東亜日報グループ」が形成され、金性洙の独占的な人事権の下、彼らは各々の役割に整然と配置されていた。宋鎮禹は東亜日報における金性洙の代理人であり、京城紡織においては同じ任に当たったのは、金季洙であった。中央学校を管理するのは玄相允であり、崔斗然はこれらの諸団体を言わばユーティリティプレヤーとして、それぞれの団体における「番頭」が欠けたり苦境に陥った際、その代わりの任に当たった。白寛洙は、宋鎮禹が表面に出られない時の彼の代役[69]であり、張徳秀はその文章能力と優れた分析能力で、普成専門と東亜日報を行き来する参謀役である。言うまでもなく、これらを統括する位置にあるのは、金性洙であり、彼自身は普成専門学校の中に本拠を構えている。彼らは何れも、巨大な「資本としての東亜日報グループ」という、防壁の中に守られている。守護神の役割を果たすのは、朴泳孝であり、神には、俗人には不可能な悪魔との会話の能力が要求されている。

日本統治期における東亜日報グループとは以上のような存在であった。それでは、我々はこれについて如何なる総括を行うことがで

67 玄相允「三一運動의 回想」,『新天地』【韓国】1946年3月號、『古下 宋鎮禹評傳』, 109ページよりの再引用。三一運動において朴泳孝との折衝役は宋鎮禹であった。また、この経緯に就いての資料としては、市川正明編『三・一独立運動』三, 原書房, 1984年8月, 24ページ。

68 朴泳孝に対する親日派批判としては、例えば、林鍾国『親日派』, 御茶の水書房, 1992年8月, 86-87ページ。

69 表1参照のこと。

きるであろうか。最後にこの点について触れることにより、むすびにかえることとしたい。

むすびにかえて—運動の基盤と「不正な金」

良いか、そこの臨政要人の両班達よ。政府が受け取る税金の中には、愛国者の金も、守銭奴や罪人の金も混じっている。そして、今、臨時政府は政府の形を取ることができない為、税金の形で活動資金を受け取ることもできない。このようなことを考えて、有志達が自ら進んで自らの財産を提供しているのに、不正な金だ何だという余地がどこにあると言うのか!![70]

朝鮮半島における日本統治期。言うまでもなく、それは、韓国が自力で開化を目指し失敗した開化期と、目覚ましい発展を遂げた大韓民国期の中間に横たわっている。失敗した近代化と成功した近代化。この対比以上に、韓国／朝鮮史を見る上で、日本統治期の重要性を示すものはないであろう。それでは一体、東亜日報グループが生まれた日本統治期とはどのような時代であり、どのような影響を後に与えたのか。

先学達の優れた研究により明らかにされているように、それはまず経済的に言うなら、それまでの朝鮮社会が急速に変化し － 従属的であったか否かは別として － 目覚ましい「資本主義」の発達が見られた時代であった[71]。その背景にあったのは、従来の経済・社会構造の急速な解体と、その結果として生じた新たな流動的な社会であった。人々は農村を離れて、ソウルへ、満州へ、そして日本へと流れだし、混沌とした社会状況が作り出されていった。

しかし、勿論、日本統治時代の朝鮮社会はそれだけで言い尽くされるようなものではなかった。当然のことながら、そこで見落とされてはならないのは、総督府と、それが抱える巨大な官僚機構の存在であった。一九二〇年以降、「文化統治」に乗りだした総督府は、それまでの「武断統治」を改め、朝鮮の「同化」を積極的に推進することになるが、その結果、朝鮮半島各地には、様々な団体が形作られることとなった[72]。看過されがちであるが、同化政策、即ち、朝鮮人を日本人化させる、ということには、単に朝鮮人に日本文化を押し付けるという意味があるだけではなく、朝鮮人を、当時の水準から見て「近代化されていた」日本人の水準に近づける、という意味が含まれていた。一九二〇年代以降の、総督府の積極的な半島経営はこのような観点から捉えることができようし、また、ある程度までは、一九三〇年代における「資本主義の発展」は、その帰結であったと言えよう。

70 東亜日報社編『雪山 張徳秀』，東亜日報社【韓国】，1981年8月，328ページ。
71 堀和生『朝鮮工業化の史的分析』，有斐閣，1995年7月、等。
72 このような「文化統治」期における、朝鮮社会の変化については、金玉根『日帝下朝鮮財政史論攷』，68ページ以下。また、慎鏞廈『韓國近代社會史研究』，一志社【韓国】，1987年9月，258ページ以下。

このようにして考えた時、我々は「東亜日報グループ」が正に、このような日本統治の「落し子[73]」であることを、知ることができよう。即ち、それは前の時代からとの繋がりにおいては、開化期における様々な「失敗した近代化」の遺産を受け継ぎ、表舞台に登場して来た。しかし、彼らはそれらを単にそのまま引き継いだけではなく、新たな近代的な経営理念を以て運営し、その財政的建て直しに見事に成功した。その意味で、彼らは過去の遺産を、継承・利用はしたが、そこに新たな要素を確実に付け加えている。それは即ち、嘗ての伝統的知識人層に欠如していた「経済感覚」であった。

重要なことは、彼らはそのような自らの活動をするのに当たり、どのような手段を利用することも辞さなかった、ということであろう。総督府からの補助金[74]、朝鮮殖産銀行からの借入、「朝鮮貴族」の有する総督府との紐帯。「不正な金」であろうと何であろうと、自らの活動に利用できるものは、全て利用し、彼らは自らの事業と勢力を拡大していった。「東亜日報グループ」はこうして獲得された安定した経営基盤の下、東亜日報という、民族運動のアリーナを提供した。彼らのこのようなやり方には、或は非難されるべき部分があるのかも知れない。しかし、このような経済基盤なしに、活動を行うことが困難であったことは、李相協や李光洙・朱耀翰等、東亜日報と対立し、自立の道を選んだ者たちが、その後親日派へと転落していったことからも明らかであろう。

「東亜日報グループ」はこうして生まれ、成長を続けていった。それは、最終的に解放の日には、半島内における、「最大の資本」且つ「最大の人脈」として登場することとなる。即ち、所謂、韓国民主党勢力の登場である。彼らがその後、どうなったかについては、別稿にて論じることとしよう。何れにせよ、「東亜日報グループ」は以上のような集団であった。解放後の彼らの歴史は、ここから始まるのである[75]。

73 *Offspring of empire*、タイトルより。
74 これについては、表3及び、*Offspring of empire*, pp.79-84。
75 解放後の東亜日報グループについては、別稿にて議論する予定である。

表1　東亜日報グループ主要団体役員一覧

東亜日報

	社　長	顧　問	副社長	専　務	常　務	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	発行人	編修長	同代理
1920	朴泳孝 金性洙	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	(欠員)	李相協	(欠員)
1921	宋鎮禹		張德秀	慎九範	李相協	宋鎮禹	金性洙	張德秀	慎九範	李相協	李　雲	金瓚永	成元慶	張斗鉉	鄭在琬	李相協 韓基岳		
1923															(欠員)			
1924	李昇薫 金性洙	金性洙 宋鎮禹		李昇薫 金性洙	李昇薫 金性洙	洪命憙	李昇薫 金性洙		許　憲	尹洪烈	梁源模	(欠員)	(欠員)	(欠員)		薛義植 金鐵中	洪命憙	韓基岳
1925		李昇薫				宋鎮禹				林正燁								(欠員)
1926																	李光洙	
1927	宋鎮禹			(欠員)	(欠員)											梁源模 金錫中	金俊淵	崔元淳
1928																		朱耀翰
1929																	朱耀翰 李光洙	薛義植
1930		(欠員)							李光洙			金用茂				宋鎮禹		
1933									(欠員)								(欠員)	
1935																	薛義植	
1937	白寛洙	宋鎮禹	(欠員)	梁源模		玄俊鎬	白寛洙									白寛洙	白寛洙	
1938				(欠員)														
1939					林正燁												高在旭	
1940	宋鎮禹	(欠員)			(欠員)	宋鎮禹		(欠員)			(欠員)					林正燁		
1943							(欠員)					(欠員)						
1944 ～1948																		

中央学校

	校　長
1915	柳　瑾
1917	金性洙
1918	宋鎮禹
1919	崔斗然
1922	玄相允
1925	崔斗然
1931	朴容喜 金性洙
1932 ～1945	玄相允

普成専門学校

	校　長	主務理事	理　事	理　事	理　事	理　事	理　事	理　事
1932	金性洙	金性洙	朴容喜	玄相允	崔斗善	金季洙	金泳柱	張鉉植
1935	金用茂							
1937	金性洙							
1938								李康賢
1939			卞栄泰					
1946	玄相允						(常務理事)	李　活
1950	兪鎮午(代理)		蘇秉昆					

京城紡織

	社　長	専　務	常　務	常　務	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	取締役	支配人	支配人
1919	朴泳孝	朴容喜			朴泳孝	朴容喜	李康賢	鮮于全	尹相殷	安鍾健	金性洙	(欠員)	李康賢	
1920									金瓚永					
1921										(欠員)				
1922			金季洙	李康賢				金季洙				曺槑鉉	金季洙	
1923		金季洙	(欠員)			(欠員)			(欠員)				李康賢	
1928											金在洙	崔斗善		
1935	金季洙			(欠員)	朴興植	崔昌学			玄俊鎬					
1936													尹柱福	
1939													金容完	郭基鉉
1941							(欠員)							
1942			崔斗善				高元勲							
1943											(欠員)			
1944		崔斗善	金容完											
1945	崔斗善	趙麟章	張世衡		陳在洪	金丙運	黄泳模	(欠員)	(欠員)					
1946	金容完			李俊穆				李俊穆						
1948 ～1950				(欠員)										

表2

京城紡織増資／払込表

年	資本金	払込額	株主当追加払込	総株数	増資／追加払込理由	備考
1919.10. 1922.4.	1000000	250000 400000	12.5 7.5	20000	設立	実73215 → 失権処理等 10529 競売譲渡　7928 失権競売　1701 無償譲与　850 相続　50
1928.1.		500000	5			
1931.3.		750000	12.5			
1933.4.		1000000	12.5			
1935.3.	3000000	1000000		60000	増資	内 20000新株 現株主(38) 16000新株 重役／縁故者(41) 4000新株 一般公募(75)
1935.6.		1500000	12.5(1)			
1936.1.		2000000	12.5(1)		紡績工場新設	
1938.3.	5000000	2000000			海東金融㈱合併	
1938.3.		2800000	40(2)			
1940.10.		3800000	25(1)		南満紡績出資	
1940.10.		5000000	60(2)		南満紡績出資	
1942.3.	10000000	5000000			施設拡張／南満紡績出資	
1942.3.	10000000	7500000	25		施設拡張／南満紡績出資	
1944.10.	13000000	10500000	50		東光製糸／中央商工合併	東光 22900／26000株 京城紡織所有

註・この表の作成に当たっては、『京紡七十年』の各所を参考とした。

表 3

東亜日報グループ関連資金移動表

年	出資・貸出者等	受資・借入者等	移動額	内容	理由	備考
1915.4.	金祺中	中央学校	3000斗落土地		中央学校引受	
1919.10.	金暻中	京城紡織	2000株		京城紡織設立	筆頭株主 一株=50円、 全20000株、 第一回納入 12.5円
1919.10.	金祺中	京城紡織	800株		京城紡織設立	第 3 位株主 一株=50円
1919.10.	金性洙	京城紡織	200株	土地担保	京城紡織設立	第 4 位株主 一株=50円
1920.7.	金祺中	朝鮮殖産銀行	?	融資	三品事件	
1920.7.	朝鮮殖産銀行	京城紡織	80000円	緊急融資	三品事件	
1921.	閔泳達	東亜日報	5000円	校舎西館	経営難	
1921.10.	金暻中	中央学校	?	運動場	増築	
1922.4.	金季洙	中央学校	?	学校裏山	拡張	
1922.8.	金季洙	中央学校	6300坪	補助金		
1924.2.	総督府	京城紡織	?	送金		1931年まで 毎年継続
1926.3.	金祺中	東亜日報	25000円	補助金	社屋新築	
1926.3.	総督府	京城紡織	28000円	補助金		
1927.3.	総督府	京城紡織	27008円	出資		
1928	金季洙?	海東銀行	300000円?	補助金	経営権譲渡	
1928.3.	総督府	京城紡織	29653円	融資		
1929.1.	朝鮮殖産銀行	京城紡織	250000円	鳴古農場	工場／織機増設 (増資不足分)	10年年賦償還
1929.2.	三養社	中央学校	1500石収穫農場	補助金	財団設立	管理三養社継続
1931.4.	総督府	三養社	156000円	補助金	咸平干拓	
1932以降	総督府	京城紡織	廃止	寄付	経営好転	
1932	金季洙?	三養同済会	200000円			
1932.3.	金暻中	中央学院	5000石田畑		学校引受	普成専門学校 経営資金源
1932.3.	金祺中	中央学院	500石田畑		学校引受	普成専門学校
			6000余坪岱地	新泰仁農場		経営資金源
1932.3.	三養社	普成専門学校	5000石収穫農場	経費補充	引受基金	管理三養社継続
1932.	中央学院	普成専門学校	24700円	寄付		
1932 ～1941	金季洙?	三養同済会	958000円			三回分割

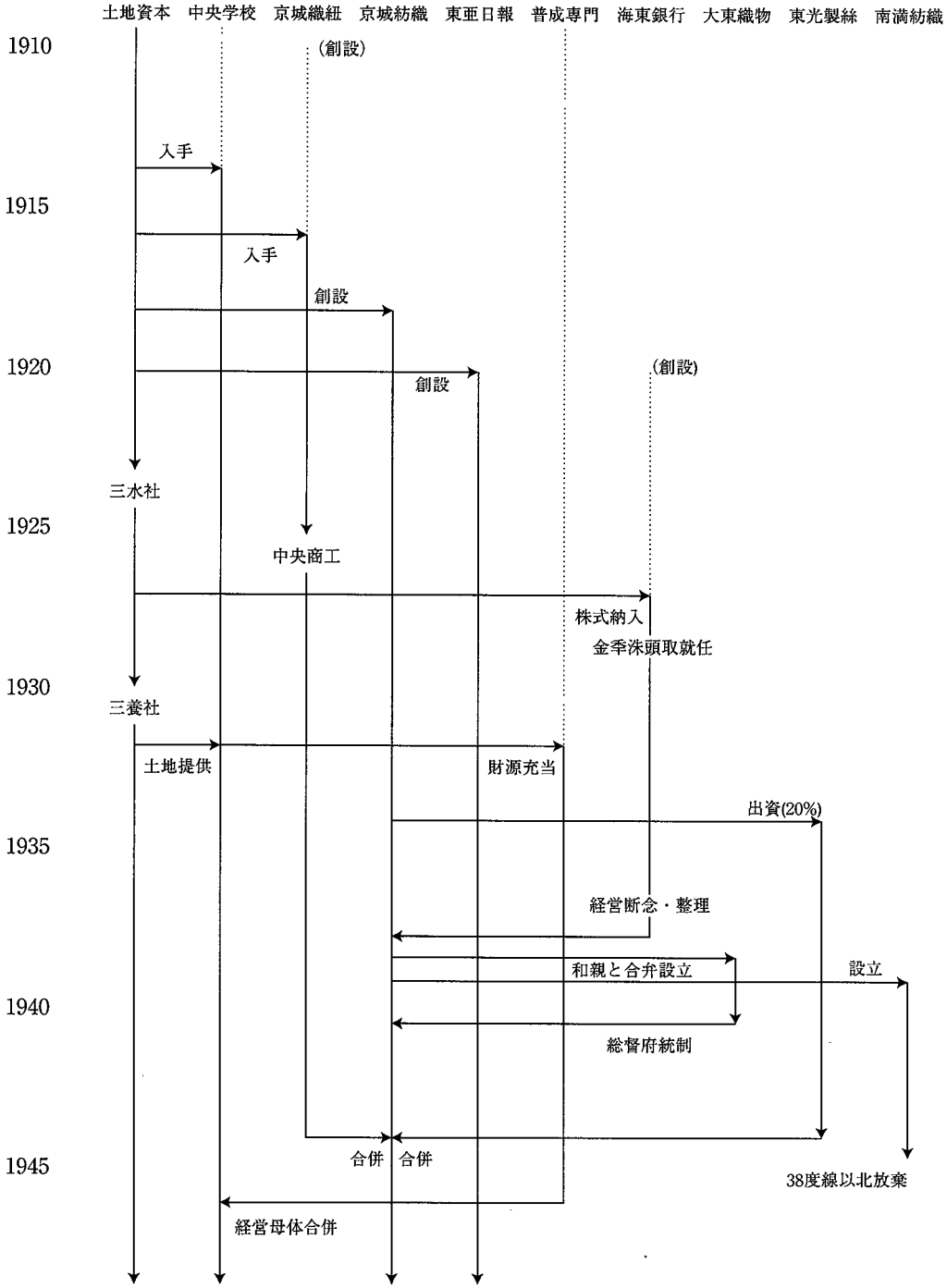
年	出資・貸出者等	受資・借入者等	移動額	内容	理由	備考
1932	朝鮮殖産銀行	京城紡織	500000円	融資	工場拡張	
1933	総督府	京城紡織	?	補助金		以後、補助金無し
1935.	金性洙	普成専門学校	20000円	校舎等	キャンパス移転	
1935.	金季洙	普成専門学校	20000円?	校舎等	キャンパス移転	
1936	朝鮮殖産銀行	京城紡織	695000円	融資	紡績工場新設	
1937	朝鮮殖産銀行	京城紡織	1500000円	融資	紡績工場新設	
1938.1.	海東金融㈱	京城紡織	2000000円	合併		
1939.12.	三養社	三拓企業(株)	1000000円	入手金	買収	
1940.4.	東亜日報	普成専門学校	20000円	貸与	遊休資金	
1940	朝鮮殖産銀行	京城紡織	2800000円	融資	南満紡績出資	この頃までに借入 朝鮮殖産銀行 3000万円 満州興業銀行 1200万円
1942	京城紡織	南満紡績	5000000円	出資		
1942	朝鮮殖産銀行	京城紡織	2500000円	融資	南満紡績出資	
1944	東光製糸／ 中央商工	京城紡織	3000000円	合併		
1945	京城紡織	韓国民主党	3000000円	政治資金		1945年段階 借入 朝鮮殖産銀行 2200万円 その他 不明
～1948	金季洙	長城中高等 17校	629町歩田畑 3700000円	寄付金等		
～1948	金季洙	海外留学生	3290000円	補助費		

註1・この表の作成に当たっては、『京紡七十年』、『三養六十年』、『東亜日報史』巻一、『仁村 金性洙傳』、『秀堂 金季洙』、*Offspring of empire*、の各所を参考にした。

註2・この表は資料から確認できるものをまとめたものであり、東亜日報グループに関する全ての資金移動を記したものではない。また、資金借入等について、その返却状況については不明である。それ故、備考に記されている借入総額等は、移動額の総計とは一致しない。

図1

東亜日報グループ所属団体派生図



Korean National Movement and Sound Economy under Japanese Rule - Study on Donga-Ilbo Group (1) -

Kan KIMURA*

Abstract

This study is to try to examine an aspect of Korean national movement and a feature of its political system through what we call "Donga-ilbo group" under Japanese rule in Korea. The reasons to argue about this group are as follows.

First, this group had a strong relationship with old groups which played great roles in Daehan Imperial periods, 1897-1910. So, if we try to understand the continuity of Korean national movement in these two periods, it is useful to examine about this group. Second, Korean Democratic Party and other Korean opposition parties after 1945 stemmed from Donga-ilbo group. It is absolutely necessary to examine the group to study about Korean democratic movement where the opposition parties played great roles, and why their movement could not succeed until 1980' s in spite of their strong economic base and mass media' s support. Third, today, the member of Donga-ilbo group is accused as Japanese collaborators in spite of their great roles in national movement. To understand the Japanese collaborator problem, we need to study what the group was.

On this essay, I argue as follows. The key to understand this group is the fact that they had some sense of economy which other groups lacked. In 1910' s, almost all other national parties or organizations were on the brink of bankruptcy because they were in the hands of traditional Yangban intellectuals who did not have this kind of economic sense. But Kim Seong-su, the leader and virtual owner of Donga-ilbo group, was a son of landowners newly emerged in this period, so he had this sense of economy as his two fathers had. As the result of his participation, Korean national movement got new power of sound economy as the base up the movement.

To insist the sound economy on the movement, Kim Seong-su needed and requested his

* Associate Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe Unibersity.

absolute supremacy on his group. Because he did not trust traditional Yangban intellectuals, he replaced these old generation with new generation which he also belonged to. As the result, almost all member of Donga-ilbo group was occupied by the generation. This is Donga-ilbo group as a line of connections. After 1945, they found their way to the political world. It is the Korean Democratic Party or Han-gug Min-ju Dang.

Donga-ilbo group had their great merit on their movement for their sound economy against other groups. But to understand why they, and only they could get it, we could not overlook from where they had got the economical resources. Of course, they had big estates, and well managed industries, but they are not all of the secrets of their sound economy. Important fact is that they had deep economical connection with the colonial government. They used Chosen Industrial Bank or Chosen Syokusan Ginko as their main bank, and sometimes did not hesitate to get subsidy from the colonial government. To understand why they could get this kind of deep connections, we should pay attention to the fact that they employed Pak Yeong-hyo as President of their companies. Pak Yeong-Hyo, Japanese Count and one of the greatest activists of civilization in 19th century, was a director of Chosen Industrial Bank in 1920' s and 30' s. They could get some advantages to get the connection and economical resources of the colonial government for this Count.

In conclusion, we can say that Donga-ilbo group was a son of the Japanese rule. They are probably the group which played greatest roles on Korean national movement and their advantage against other groups was that they had their sound economy and connections with colonial government, for which they could insist their economy. But their sound economy was a economy, which only under Japanese rule their could insist. In 1945, they are one of the strongest political groups in South Korea. But after 1945, they could not find their economic base with which they could insist their sound economy on their movement, under new political and economic system. Now we can understand why they could not win politically after 1945 in spite of their strong outlook in 1945.